

## 特集 合同礼拝

### —大人と子どもが一緒の礼拝—

近年、日本キリスト教会の中で、大人と子どもたちとの合同礼拝を行う教会が見られるようになりました。今、検討中という教会もあるでしょう。合同礼拝に踏み切ることに躊躇している教会があるかもしれません。そこで、既に合同礼拝を実施している教会では、どのような考えで、実際にどのようにして行なっているのか、5つの教会から事例をご報告いただきました。これはいずれも、子どものための説教と大人のための説教の両方を行う例ですが、最近、いのちのことば社CS成長センターから発行された、「子どもと一緒にの礼拝」（鞭木由行著）では、説教を一本化した例も紹介されています。これらを参考に、貴教会でも合同礼拝のあり方を御検討されてはいかがでしょうか。（大会教育委員会）



## 乳幼児から大人まで——横浜長老教会の例

伊藤 明彦 (横浜長老教会長老)

横浜長老教会の主日礼拝は、毎週、乳幼児から大人まで集っています。そのため日曜学校礼拝はありませんし、「合同礼拝」という言葉もありません。サムエル記上の3章で、主は幼いサムエルをお呼びになりました。さらにマタイによる福音書19章13節以下で主イエスは、子どもたちをみもとに招いていらっしやいます。横浜長老教会に集う子どもたちは信者の子どもがほとんどです。子どもたちにも聖霊は下りますので、子どもたちは「信者」です。そして未陪餐会員は「会員」です。未陪餐会員ではない子どもも、教会の「メンバー」であることには変わりありません。主は老若男女を教会に招いていらっしやいます。礼拝は教会に招かれている者の「集い」です。そのようなことから、礼拝は「ひとつ」であり、子どもだけが別な礼拝を行うことは、主イエスを頭とする教会にとって、ふさわしくないと考えます。

毎主日9時から始まる日曜学校は、朝会の位置づけである「はじめの会」(15分程度)で讃美歌・交読文・祈り・連絡を行なった後、分級を40分ほど行ないます。乳幼児の分級から大人の分級まで、それぞれ聖書の学びをします。そして10時15分から礼拝。乳幼児も参加します。子どもの状態によっては「礼拝堂別室」(母子室とは呼ばない)で礼拝を守る場合もあります。中学生以上は最後まで礼拝に参加しますが、小学生以下の子どもたちは、途中礼拝堂から退出し、後半礼拝に再参入、自ら献金を捧げ、祝祷、礼拝後の教理の学び、報告と続きます。親が教会員ですので、礼拝後は家庭から持参した弁当を食べ、親の集会や会議が終わるまで教会で過ごすこともあります。礼拝後は子どもたちもいろいろな人と昼食を食べているので、初めて教会に来た人は、誰が誰と親子なのか見ただけでは分らないと思います。子どもたちもそれぞれ、いろいろな人と交わっているのです。

礼拝では聖書が2か所読まれ、先は聖書物語の説教で、この内容を直前の分級で学んでいます。後は一般の説教で、この間、小学生以下は退出します。中学生以上はこの説教も聞くわけですが、子どもだから「まだ理解できない」という事は考えていません。

乳幼児が礼拝に参加している時は、礼拝中に子どもが騒いだり、走り回ったりする事もあります。礼拝中の静粛さを重んじることから、子どもたちを礼拝から排除することはしません。私自身も初めのうちは気になりましたが、今は全く気にならず、逆に乳幼児の声がないと寂しく感じます。以前、ある子どもは祈りのときに限って、しゃべり続けていました。よく聞いてみると、牧師の祈りのまねをしていたのです。それがこの子にとっての祈りだったので。礼拝は教会に招かれている者の集会ですから、厳密に静粛である必要はないのです。そこで横浜長老教会では長老の礼拝担当者も「司式」とは呼ばず、「司会」と呼んでいます。



クリスマスオラトリオ — 子どもも大人も一緒です—

## 大人と子どもが一緒の礼拝——磐田西教会の例

さいとう      おさむ  
齋藤      修（磐田西教会牧師）

今回、大会教育委員会から、「成人と子どもが一緒の礼拝」について全体像が分かるようにご紹介いただければ、とのご依頼に応える形で、私たち磐田西教会の礼拝と日曜学校を紹介できますことを感謝いたしております。

私たち磐田西教会では長年、大人と子どもが一緒に礼拝をする形をとってきました。それは、本来礼拝は一つである、との考えに基づいていると思います。ただ、中学生にも分かる説教をする事が大切との考えを踏まえつつも、大人と子どもに対して同じ説教をすることは大変な困難が伴うものと思われまます。ですから、磐田西教会では「子どもための説教」といわゆる「説教」の二つを牧師が行っています。その際、二つの説教の位置関係や礼拝順序は次の通りです。なお、礼拝の司式は長老です。

1. 招詞 2. 讃詠 3. 主の祈り 4. 信仰告白 5. 讃美歌 6. 聖書(旧約聖書) 7. 祈り(祈りの後、子どもたち小学生以下は前の席に座るよう促される) 8. 子どものための説教(説教箇所朗読の後、10分以内) 9. 祈り 10. こどもさんびか(さんびか終了後、小学生以下はもとの席に戻ってよいが、基本的には別室へ行き、説教が終わるまでそこにいる。中学生以上は別室には行かず、大人向けの説教を聞く) 11. 聖書(新約聖書) 12. 讃美歌 13. 説教(大人向け、約30分) 14. 祈り(祈りの後、子どもたちは再びもとの席に戻る) 15. 讃美歌 16. 聖礼典(洗礼、聖餐) 17. 公告 18. 献金 19. 頌栄 20. 祝祷

これからも分かるように、子どもたちは礼拝の初めから大人と一緒にです。礼拝において子どもたち(主に小学生以下)が実際に席を外すのは、13と14の時だけです。他は全て一緒にです。また、13と14の時、別室は安全を考えた透明なアクリルガラスの戸で隔てられているだけで、室内にはスピーカーも設置してありますので、双方の様子が分かります。

他方、10時30分からの礼拝に先立ち9時50分から当番の日曜学校教師の司会により、「はじめの会」が行われ、次の月の礼拝時に歌うこどもさんびかを歌い、祈ります。その後、10時20分頃まで、幼稚科(小学校入学前)、下級科(小学校1-3年)、中級科(小学校4-6年)、上級科(中高校生科)、成人科(高校卒以上の大人)に分かれて分級をします。日曜学校に成人科という大人のクラスがあるのも磐田西教会日曜学校の一つの特徴でしょうか。分級では小学生以下のクラスでは当日の子どものための説教箇所の学びが主です。もちろん、礼拝における大人の説教箇所とは違います。他の分級は各担当の教師が教会教育部会における承認を受けて、内容を決めています。

現在、いわゆる日曜学校の生徒は幼稚科1名、下級科3名、中級科1名、上級科5名、の10名です。全員教会員の子どものみですので、毎週ほぼ全員出席しており、感謝です。「あなたの若き日に、あなたの造り主を覚えよ」(伝道の書12:1 口語訳)との御言葉どおり、日曜学校の子どもたちが聖霊によって信仰を自ら言い表し、その信仰によって、神と人とに仕える教会の歩みと共に生涯を送る者とされることを感謝と喜びの中で祈っています。

## 合同礼拝のこれまでとこれから——志木北伝道所の例

三好<sup>みよし</sup> 明<sup>あきら</sup>（志木北伝道所牧師）

志木北伝道所では、2004年4月から、毎週の主日礼拝を子供と大人の合同の形で行ってきました。この合同礼拝を実施する前は、小学校高学年の子供たち数名が日曜学校に来ていました。これらの子供たちが中学生になってからも礼拝に続けて出席できるためには、主日礼拝の中に子供のための説教の時間を設けて、最初は子供説教だけを聞いて帰るようにし、次第に大人の説教も聞くことができるようになっていけばよいのではないか、ということを考えました。また、それらの子供たちとは別に、遠くから電車を乗り継いで親と共に主日礼拝に来る小学生の子供もいました。距離や時間の問題のため、その子供が午前8時45分からの日曜学校礼拝に集うことは難しいので、主日礼拝の中に子供説教があれば、その子も分かりやすい説教を共に聞くことができるのではないか、と考えました。

こうして、主日礼拝の中に子供説教を設けて、子供と大人が合同で礼拝をするようにしてはどうか、ということが具体的な課題となってきました。そこで、2003年の2月にアンケートを取って、小学校高学年の子供たちの意見を聞いた結果、2003年度に何回か予行演習をして、2004年4月から、毎週の主日礼拝を子供と大人が合同でささげることとなったのです。

そのとき行ったアンケートの中で、子供たちに合同礼拝の理由を次のように説明しました。「なぜ、日曜学校の形を変えるのでしょうか？それは、二つ理由があります。一つは、お家の人に連れられて教会に来た子供たちと、日曜学校に来ている子供たちが、いっしょに神さまのお話を聞くようにするためです。もう一つは、中学生・高校生になっても教会に来ることができるように、だんだんと大人の礼拝に慣れていただくためです。つまり、①小学生の間は、子供のプログラムに出席していただきます。②中学生の間は、子供のプログラムでも大人のプログラムでも、好きな方に参加してください。③高校生になったら大人のプログラムに出席していただきます。」これは、教会に来る子供たちを神の民の一員として育てていく、という考え方に基づいています。

具体的には、主日礼拝前の分級の時間と主日礼拝の前半の子供説教・献金を子供のプログラムとし、その後を大人のプログラムとしています。子供説教は原則として牧師が担当しますが、第五主日には日曜学校教師にも担当してもらっています。子供説教と献金の後、子供は帰ることができます。親と共に来ている子供は、静かに過ごすことができる場合は親とともに礼拝堂に残りますし、それが難しい場合は別室で過ごします。この3月から別室でも礼拝の映像を見て、音声を聞く設備が整いました。

現在、小学生以下で子供説教を聞くレギュラー・メンバーはいませんので、大人に向かって子供説教を語っている状態です。しかし、かつて合同礼拝に出席していた子供たちの中には、大学生、高校生になっても時々、主日礼拝に出席する人たちがいます。また、この3月に教会から徒歩5分のところに大規模な集合住宅が完成し、子供連れで新しい方々が主日礼拝に来ることが予想されます。子供と親が共に礼拝をささげることのできる教会として、新しい方々を受け入れていきたいと願っています。

## 合同礼拝の新しい発見と喜び——岡山伝道所の例

さんべい    ながとし  
三瓶    長寿（岡山伝道所応援教師）

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」（マルコ10:14）。

教育委員会から、近頃「成人と子どもの合同礼拝」を検討している教会があるので、岡山伝道所の例を紹介するように依頼されました。

当伝道所が合同礼拝を行うようになったのは2008年8月からです。会員、客員の家庭の数少ない子どもたちが遠隔地から出席するので、それまでは成人礼拝後約30分、会堂の前に小さな椅子を丸く並べて説教を中心とした日曜学校礼拝を守っていました。大人の礼拝が終わった後で、会堂内はくつろいだ気分で落ち着かず、子どもたちが心を集中して礼拝を守ることがむずかしく、教師会、伝道所委員会は熟慮して、やむをえず「子ども説教」を成人礼拝の中に組み入れることにしました。

ただこの決心をするにあたって、二つの大きな懸念がありました。一つは成人礼拝がこれまで培ってきた聖なる空間と時間のなかでもたれる礼拝の伝統と霊性、雰囲気を失ってしまわないかということ。もう一つは「子ども説教」を大人が説教として聞けるか、またおなじ説教テキストを使う「子ども説教」と「成人説教」の間に齟齬が起らないかという心配でした。しかしそれらはいずれも杞憂でした。

子どもたちは合同礼拝に最初から出席します。礼拝前の静けさのなかに身をおいて、緊張と期待、聖なる喜びの雰囲気を体験することは幼児、子どもにとって希有な機会です。子どもたちはふだん家族とともに着席しています。成人説教のための聖書朗読の前に、「子ども説教のための聖書朗読 - 子ども説教 - 短い祈り - 子どもさんびか」が入ります。その後、子どもたちはそのまま、あるいは別室に移り、献金の前に会堂に戻ります。

説教は牧師と4人の教師が奉仕をし、講壇の下の聖餐桌から話します。時間は7～10分ぐらい。子どもが不在のときも省略せず語られます。説教テキストは成人説教と同じ箇所、ここでは「世界共通聖書日課」（旧約、詩編交読、使徒書、福音書）を用いており、子ども説教は福音書から語られます。

合同礼拝を開始するにあたって教師会で、説教とは何か、テキストから何を語るのか、説教の対象は子どもであるが、聖書の知識を与えるのみではなくメッセージを伝える、それはまた大人に対してもメッセージであることを確認しました。準備としては、教師会で聖書箇所と中心使信を確認するぐらいで、教師たちが個々に牧師に尋ねることはありますが、特別な学び、指導はしていません。参考書としては「共通聖書日課」（参照日曜学校誌2006年冬季号61頁）を取りあげた2007～2009年の「日曜学校誌」（vol.56-58）、「旧新約聖書講解」、牧師のここ数年の印刷されたペリコーベ説教（「みことば」）他を用いています。実際どのような説教が行われているのかは、今年の日曜学校誌（vol.61）の「説教2」（低学年用）の5、8、11、3月をごらんください。

合同礼拝が始り、「子ども説教」が語られて、子どもだけでなく、大人たちも、～求道者、初信者、会員、牧師も～み言葉を聞く大きな喜びを経験しています。人はいくつになっても神さまの子どもたちですから。しかし、またそれだけではなく「子ども説教」は福音のテキストの泉から最初にわき出る混じりけのない澄んだ水のように、説教が本来もっている本質、資質をたくわえているからです。大人への説教は、説教の河の流れの中流、下流で、信仰、人生、社会全体に多岐に展開され、時には生活から遊離した抽象言語がもちいられます。しかし子ども説教は福音のいちばん大切な核心部分が、わかりやすく親

しみのある、視覚化、絵画化、物語化されたことばで語られ、聞き手はそれを瞬時に自分の心に受け入れ、生活へと転換することができます。子ども説教は、その後語る牧師にとっても、初心者にテキストの説明をする必要もなく安心して先へ進むことができます。

礼拝に子どもが加わって、あらためて聖書が語る「一つの神の民の礼拝」を経験することができました。聖書本来の礼拝の再発見、復帰でした。西欧を主流として歩んできたキリスト教は長く「知的」なキリスト教に傾き、改革教会の礼拝は狭い意味で「説教礼拝」になり、子どもたちを礼拝から排除することになっていたように思います。しかし、聖書の礼拝は大人と子どもと一緒にささげる礼拝です。「天に輝くあなたの威光をたたえます。幼子、乳飲み子の口によって」（詩編8:2-3）。「主を賛美せよ。若者よ、おとめよ、老人よ、幼子よ」（詩編148:7,12）。「玉座から声がして、こう言った。『すべて神の僕たちよ、神を畏れる者たちよ、小さな者も大きな者も、わたしたちの神をたたえよ』（黙示録19:5)。小児洗礼をおこなってきた私たちの教会にとって子どもたちを「合同礼拝」に迎えることは必然で理にかなっています。子どもたちを聖餐に招く「小児陪餐」の検討も急がなければなりません。

世界の多くの教会は「子ども説教」と「成人説教」を分けずに一つの説教でまかっています。しかし歴史の浅い日本の教会では成人説教も大切で、一つのテキストで「子ども説教」と「成人説教」が語られることが教会形成や伝道にとって必要ではないかと考えます。

当伝道所では現在「分級」をもっていません。年齢に応じた聖書の教育と、子ども同士の交わりが必要だと考えています。その欠けを毎週礼拝後もたれているランチタイムやティータイム、こひつじ文庫で補おうとしていますが、十分ではなく、その課題を残しています。

## 合同礼拝と分級の実際——函館相生教会の例

### I 合同礼拝

ひさの      のぞむ  
久野      牧（函館相生教会牧師）

#### 1. 合同礼拝にいたるまでの経緯

わたしたちの教会では、2009年9月からの礼拝を、成人礼拝と子どもの礼拝を一つにした〈合同礼拝〉に全面的に移行しました。その狙いを教会員に対して次のように説明しました。「合同礼拝を実施する最大の狙いは、成人と子どもたちが共に一つの礼拝に連なることによって、教会全体が子どもたちのことを以前にもまして深く心に覚えることと、子どもたちが成長するとともに成人礼拝に結びつくようになることです。さらにこれによって、親と子どもたちが、ほぼ同じ時間に礼拝に来、また同じ時間に教会から帰ることが可能となります」。

親と子が一つの礼拝に連なるという礼拝の本来の姿を回復するとともに、信仰継承や子どもへの宣教ということを心にとめながら、実施に踏み切りました。それに至るまでに、日曜学校教師会や小会において研究や協議を重ねましたし、また教会員からの意見をアンケート調査などによって聞き取りました。そして、2009年4月から毎月1回の合同礼拝を実施し、その間、礼拝順序や礼拝要素に関して、試行錯誤も重ねました。そして2009年9月から、全面的に合同礼拝に移行いたしました。

## 2. 合同礼拝の実際

日曜日、日曜学校教師は、午前9時30分に日曜学校室に集まって祈祷をし、その日のことについての打ち合わせをします。そして9時45分から、まず分級を始めます。みんなで集まり、祈祷をしたあと、各クラスに分かれます。分級のクラス分けは、原則として、幼稚科、小学科下級、小学科上級、中学科の4クラスです。分級の内容は、日本キリスト教会の日曜学校誌の説教教案や分級教案に基づいて、その日の子どものための礼拝説教をよりよく理解するための学びをします。

しかし、いつもこの四つの分級が行われているわけではなく、時には、皆が一つになって、“合同分級”という形をとることもあります。特に、2011年度は、幼稚科・小学科が一つになって、主イエス・キリストの生涯を追う<すごろく>作りをする機会を多く持ちました。これは、生徒たちも教師たちも、聖書をよく読み、力を合わせて作業する楽しい時となったようです。これに関しては、後半部分で紹介させていただきます。

10時20分までには分級を終えて、子どもたちは礼拝堂に移り、10時30分開会の礼拝に連なります。礼拝順序の一例を以下に記します。

〔主日礼拝順序〕(2012年3月11日)

- 前 奏
- 招きの言葉      イザヤ書49章15-16節
- 讃 詠            こどもさんびか25
- 主の祈り
- 信仰告白        使徒信条(聖餐式があるときは、日本キリスト教会信仰の告白)
- 子どものための聖書      マルコによる福音書11章1-11節
- 祈 り
- 子どものための説教      「エルサレム入城」
- 祈 り
- 讃 美 歌        こどもさんびか5
- 献金・感謝
- 子どものための祝福 (子どもたちは起立)
  
- 讃 美 歌        [21]-209 (このとき子どもたちは退出)
- 聖 書            テモテへの手紙二、4章9-15節
- 説 教            「急いで来てください」
- 祈 り
- 讃 美 歌        [21]-469
- 頌 栄            542
- 派遣と祝福
- 後 奏



多少の補足をさせていただきます。子どものための聖書と説教は、基本的には日曜学校誌のカリキュラムに基づいています。子どものための説教は、日曜学校校長の長老が月1回担当し、その他はすべて牧師が行います。献金の時には、教会員の奉仕者3名と共に、子どもが一人加わり、子どもたちの献金を集めるために奉仕します。献金の祈りに続いて子どもたちのための祝福が告げられ、そのあとの讃美歌の間に子どもたちは退出します。子どもたちは、親が礼拝に出席している場合は、親と共にその後も礼拝に連なる者もいます。また図書室で本を読んだり、そのまま家に帰る子どももいます。合同礼拝以前の礼拝と比べて、礼拝順序が少し複雑になり、時間も全体で5～10分くらい長くなりましたが、特に問題はありません。

2009年9月から今年の3月までの間、子どもの出席がなかった合同礼拝が3回ありました。その時でも説教者（3回とも牧師）は、子どもに語るために準備していた説教を、少しばかり言葉を変えて、成人の礼拝者に向けて語ります。このようにして、子どもたちへのメッセージを成人も共有し、次の礼拝には子どもたちが出席できるようにと祈りをささげます。

### 3. 今後の課題

このような形での礼拝を始めて、高齢者だけでなく、多くの礼拝者が、子どもたちの礼拝の姿から、力を与えられたり、元気づけられたりしています。喜びの礼拝となっている、と言っても良いでしょう。また、子どもたちのための説教の方が分かりやすいという、牧師にとっては少し複雑な思いにさせられる反応も出ています。いずれにしろ、合同礼拝に移行したことによるマイナス面は、ほとんどありません。この合同礼拝を続けていくための課題はいくつもあります。なによりも、さらに多くの、そして多様な年齢の子どもたちが礼拝に出席するようになるための努力をしなければなりません。わたしたちの教会の2011年の日曜学校出席者は、平均6名です。現在、在籍している生徒は、10名ほどです。その中で、教会員の子どもは2名だけです。子どものための伝道活動も、子ども図書室などを通して行っていますが、願っているようには事柄は進みません。さらに子どもたちに対する伝道の働きとともに、小・中学生の子を持つ若い親が礼拝に出席するための工夫も必要です。そのような課題を抱えながら、わたしたちは、新しい時と状況が到来することを期待して、主の日ごとの礼拝をささげ続けています。子どもたちの力に満ちた透明感あふれる声に包まれて。

## Ⅱ 分 級

にしおか としこ  
**西岡 淑子** (函館相生教会日曜学校教師)  
ひさの まりこ  
**久野真理子** (                      同上                      )

### 2011年度の分級の様子——「すごろくでイエスさまの生涯」

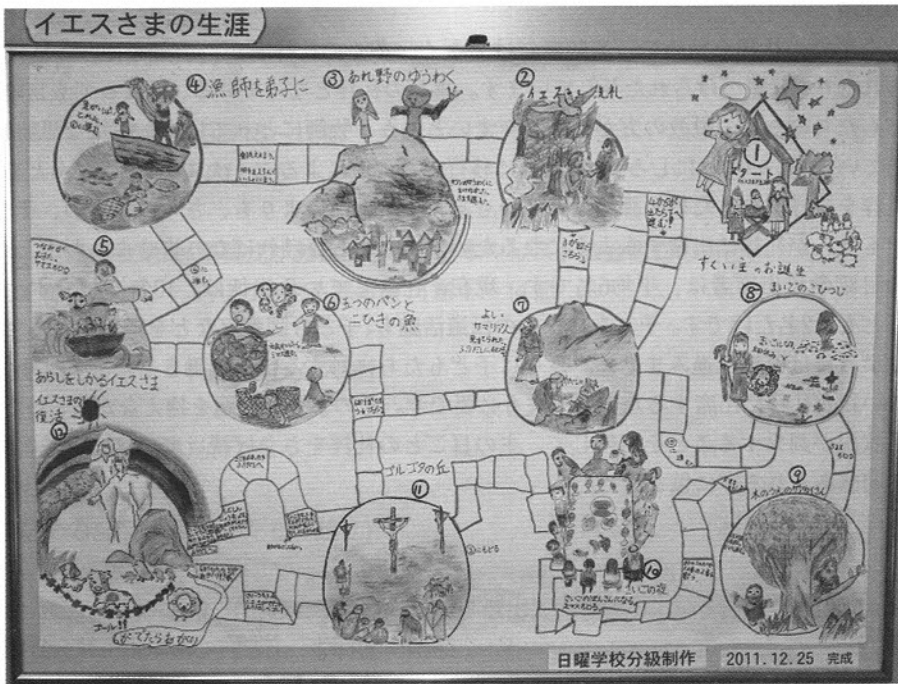
上記のように合同礼拝の前の30～40分間、分級が持たれています。小学科、幼稚科合同の分級は、出席人数子ども2～6名、教師2名が4月から30数回にわたって「すごろく・イエスさまの生涯」を製作しました。み言葉を生き生きと学び、心に残るようにという願いでした。



# [特集] 合同礼拝

すごろくは下記の12場面で構成されています。(下の写真)

- ① 〈スタート〉すくい主のお誕生(ルカ2章、マタイ2章1～12節)
- ② イエスさまの洗礼(マタイ3:13～17)
- ③ あれ野の誘惑(マタイ4:1～12)
- ④ 漁師を弟子に(マタイ4:18～22、10:2～4)
- ⑤ あらしをしずめるイエスさま(マルコ4:35～41)
- ⑥ 五つのパンと二ひきの魚(ヨハネ6:1～14)
- ⑦ よいサマリア人(ルカ10:29～39)
- ⑧ まいごのこひつじ(ルカ15:3～7)
- ⑨ 木のうえのザアカイさん(ルカ19:1～10)
- ⑩ さいごの夜(ルカ22:7～46、マタイ26:17～56)
- ⑪ ゴルゴダの丘(ルカ22:54～23:49)
- ⑫ 〈ゴール〉イエスさまの復活(ヨハネ20:1～21:19)



## ☆教材

紙(画用紙とエスキース紙)・色鉛筆・カラーマーカー・のり・はさみ・額

## ☆分級の流れ

- 1、教師が聖書を読む。子どもたちは目を閉じて聞く。全員で一節ずつ聖書朗読をする。
- 2、それぞれが心に残った箇所、絵にしたい箇所を話し合い、一つにしぼる。
- 3、次週、その箇所についての学びをする(こどもが選んだ箇所を教師が学び準備)。
- 4、絵を描く。なるべく何も見ないで、自分の想像力、創造力で。それを切抜き、貼る。  
どんなに小さい絵でもどこかに貼って生かす(貼る作業は教師がすることが多かった)。

## ☆分級の様子・子どもたちの様子

幼稚科の子どもたちはお母さんとお魚をたくさん描いたり、良いサマリア人のたとえの中の強盗に襲われた旅人の血を描いたりしてくれました。小学生の男子がしばらく考えてから、ガーッと街の家々を描きだした姿も印象的です。羊を描くならおまかせの小学生は、いろいろな場面に羊を登場させました。また、「ゴルゴダの丘」の時は、子どもたちは落ち着かず、頭をかかえてどうしても描くことができませんでした。結局、その個所は、教師が描きました。絵を描きたくない日、描きたくない子は、マス作りや指示の言葉（「100回休み」「ふりだしにもどる」とか）を書いていました。

☆完成！「すごろく」で遊びふける。（下の写真）

今年の1月からすごろく遊びが始まりました。マスには『あれ野の誘惑』では「誘惑に負けなかったので3マス進む」とか、『五つのパンと二匹の魚』では「げんき回復・5マス進む」のように、内容に合った言葉が子どもたちによって、考えられ、書きこまれています。また、「交読文を読む」、「こどもさんびか52番の2節を歌う」などいろいろあり、はらはらドキドキです。時間になったところで、手を重ねて、罰ゲーム(しっぺ)です。

世界でただ一つの「わたしたちのすごろく」。子どもも大人も、この「すごろく」を愛していることと言ったら…（もちろん、礼拝のために聖書を読み、準備していますよ、短時間）。

すごろく作りを通して、イエスの生涯にじっくり取り組み、わたしたちの心にも言葉が深く刻み込まれ、イエスさまがより身近に感じられるようになりました。

この4月から月一度全員（中学生も）で、「すごろく」を楽しんでいます。

